

を身につけ合っていくことであることを、愛することの意味の深いところにつなげて理解し合いたいと

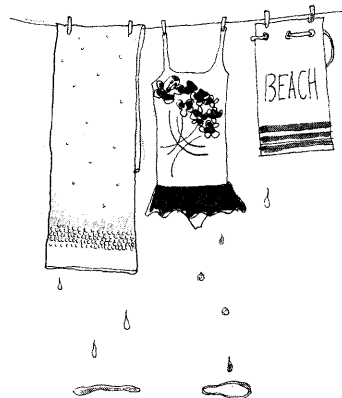
願っています。

(安部幼稚園園長・日本体育大学女子短期大学)

# 『病院で死ぬということ』

山崎章郎 (主婦の友社)

中村 弓子



今年三月中旬に、日本医師会の生命倫理懇談会が末期のがん患者などに対する末期医療のあり方について「患者の尊厳死の意志を尊重して、患者が望む場合は積極的な延命処置を停止してもよい」として、尊厳死を求める患者のための「自然死法」制定を打ち出す報告書をまとめて発表したことは新聞紙上などで大きく取り上げられたので記憶していらっしやる方も多いのではないだろうか。(なお、苦痛

を訴える患者に対して注射をうつなどして死なせる「安楽死」と「尊厳死」が画然と区別されなければならぬことは、この時の報道でも指摘されていた通りである。)

今の日本の精神風土のなかでは、この「尊厳死」そのものがまた単に「延命処置の停止」という「死に方」の一つのマニユアル化する危険性も孕んでいるが、しかし本来「尊厳死」とは、まさに、医療と

いうものをそのようにマニュアル化してしまうことを拒絶して、病気を単なる「現象」としてではなく、病人の人生の出来事として捉えるという全人的視点の到達点にこそ出てくるものである。(考えてみれば、今の日本では、医療に限らず、教育においても、そして個人の生活において最も内密なものであるはずの恋愛においてさえも、全人性の欠如と方法論のマニュアル化という「不幸」が支配的なのではないだろうか。)

本書『病院で死ぬということ』は、日本の一般病院の医療システムが根本的に、治癒して社会復帰できる患者のために出来上がっており、死にゆく運命の患者がどんなにみじめな思いの中で死んでいっているか、どんなに多くの家族が傷ついてきたか、末期医療の現場から問題の提起をすると同時に、一冊の本との出会いをきっかけとして著者が経験した末期医療に対する考え方の根本的な転換と、その結果として到達するべくして到達した「ホスピス」のヴィジョンについて述べたものである。

前半は、著者が直接的、間接的に末期医療の現場で出会った患者の「みじめな」状況がこれでもかこれでもかと(と言っても五つの例であるが主観的には「これでもか」なのである)挙げられている。その「みじめさ」は、根本的に、患者の死が、医療側と家族の間だけで綿密に話し合われ対処の仕方が決められていくために、死んでゆく人自身は死にゆく過程の中で阻害され孤独になり、苦しい病状の中でひたすら不信をつのらせながら衰弱してゆくことになるところにある。患者に真実を伝えることがタブーであり、患者の命を一分一秒でも延ばすことが医療の目的とされている限りこれはやむをえない事態と考えられていた。

しかし、著者が当然と思いきやこんでいたそのような医療観は一冊の本との出会いによって根本から揺さぶられることになった。それは、著者が医者として八年の経験を積んだあとに船医として乗りこんだ南極海の地質調査船上で読んだエリザベス・キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』の中の次の一節である。

「患者がその生の終わりを住みなれた愛する環境で過ごすことを許されるならば患者のために環境を調整することはほとんどいらない。家族は彼をよく知っているから鎮痛剤の代わりに彼の好きな一杯のブドウ酒をついでやるだろう。家で作ったスープの香りは、彼の食欲を刺激し、二さじか三さじ液体がノドを通るかもしれない。それは輸血よりも彼にとってははるかにうれしいことではないだろうか。」

著者はこの一節を読み終えたとき「体じゅうの血が逆流するのではないか」と思うほどの深い感動を受けたという。それは医療の「技術」の視点から病人の「人間」の視点への根本的転換を促された著者が感じずにおれなかった感動だったのであろう。

本書の後半は、キューブラー・ロスの書との出会いによって根本的に変えられた著者が改めて末期医療の現場で試みた、患者の「人間」との取組みの物語である。中でも最後の「息子へ」と題された節に語られている、著者と同年輩の四十代の胃ガン患者

の話は、著者は医者として、患者は患者としてであるが、ともにガンと可能な限り完全に人間的に闘おうとした真の「戦友」同志の感動的な物語である。

そして、このような試行錯誤の結果、著者が到達した末期医療専門の「ホスピス」のヴィジョンは、基本的に患者の意志によって選択された治療法により、特に疼痛のコントロールによって、患者が自分の人生の最後を十分に人間的に全うすることを助ける場所としての「ホスピス」であり、著者は今年から実際に聖ヨハネ桜町病院のホスピスの指導者となっている。

非常に迫力のある文章にぐいぐいとひっぱられて本書を最後まで読み終えて、ふと改めて感じるのは、あのパスカルの言うところの「一人の著者を見るのを期待していたところを一人の人間を見いだしたという大きな喜びである。これは単に医療「問題」や医療「方法」について述べた本ではない。「問題」や「方法」について語りつつ著者の「人間」とその「人間」に起こった根本的転換、ひとつの

「回心」ともいうべきものを語った本である。日本エッセイストクラブ賞を受賞したこの本の見事な「文体」は、医者としては珍しい心理描写の才などから来るものではなく、患者の内面に入ってゆく想

像力の豊かさ、もつと言えば患者の「人間」に対する愛そのものから生まれ培われたものであることを、読む者は実感せずにはられない。

(お茶の水女子大学)

# 『子どもたちの育ちを見つめて』

村石 京 (フレーベル館)

『お茶の水女子大学

附属幼稚園の生活から』

勝部 真長

ことし定年で退官された附属幼稚園教頭の村石さんのこの本を手にして、この三十数年の時の流れをふりかえりつつ、私自身もある感慨にふけていたのです。お茶大の学生の時は、旧姓石黒さんといつて可愛いお嬢さんで、私の講義をとっていらしたのですが、その答案の字のきれいなのと、よくま

とまった内容とで、私の印象に残っている人でした。ただ石黒さんというのが二人いて、時々間違えたりしました。しかし幼稚園にお勤めになってからは村石さんとなって間違えることなく、その本当に真摯な子どもたちへの接し方に感服していました。講演とか執筆とか、学校の外の活動に気を散らすこ

